田中（たなか） 一輝（かずき）さん（39歳）　愛西市赤目町

手に取りたくなるものを育てる

田中さんの畑では、春になるとダイコンの収穫が始まります。この時期は朝の3時から作業を行い、毎日2，000kgのダイコンを出荷しています。安定して出荷を行うために今は1シーズンで3つの品種のダイコンを栽培しています。

「初めに取れるダイコンは1月初旬、お正月が終わってすぐにまいた種が育ったものです。ダイコンは気温が低くなりすぎると花芽をつけますが、そうすると花や種を育てようとして根が育たなくなってしまいます。なので最初は寒さの厳しい時期でも花芽のつきにくい品種で種まきを行い、気温が上がってくる2月、3月とそれぞれの季節に合わせて品種を変えています」。現在3ヘクタールのほ場でダイコンの他に夏はササゲを、冬にはレンコンを栽培している田中さん。各作物でシーズンを通して安定した出荷が出来るように気を使っていると話します。

そんな田中さんが農業を始めたのは約20年前に実家の農地を継いだのが始まりです。「もともとはおじいさんの農地でしたが、体を悪くして、おばあさんと母が管理をしていました。農業学校を卒業してからは自分が引き継いで作業をしています。栽培も経営も最初から自分でやらなければいけないというのは苦労した部分もたくさんありましたが、同じ組合の先輩方にも助けてもらい、今まで続けています」。

消費者が手に取りたくなるキレイなものができるように気を使っているという田中さん。そのためには品種や栽培の方法など、様々な条件に気を遣う必要があります。「自分はまとまった1区画で農業を行っているのではなく、他の農家さんから引き受けているほ場など、地域内に点在するほ場を管理しています。八開地域は砂壌土で水はけのよい土壌がダイコンやニンジンの栽培に適していると言いわれますが、実際は場所によって少しづつ土質も変わってきます。そのほ場に合う品種は何か、いつ、どう育てるとよいものがたくさんできるか、毎年いろいろと試しながらより良いやり方を考えています」。収穫の時まで実際の出来が分からないのがダイコンの難しさだと田中さんは話します。

最後に読者の皆さまへ向けて「ぜひ愛知県産のダイコンを食べて欲しいです」とメッセージをいただきました。